



高知県内にある遍路道の中で、四国霊場35番札所の「清瀧寺境内」と宿毛市にある39番札所延光寺から愛媛県南宇和郡愛南町の40番札所観自在寺に至る高知県側の峠道「観自在寺道」が、令和3年10月に国史跡に追加指定されました。

また、「土佐節の製造技術」は、令和3年9月に国の登録無形民俗文化財制度創設後、初めての登録となりました。

写真 左上「土佐遍路道観自在寺道から望む宿毛湾」 右上「清瀧寺境内」 下「改良土佐節」

- |                                   |                                |
|-----------------------------------|--------------------------------|
| 1. 国史跡「土佐遍路道 清瀧寺境内」—追加指定— … 2     | 11. 野中廃寺について—見えてきた謎の古代寺院— … 11 |
| 2. 国史跡「土佐遍路道 観自在寺道」—追加指定— … 3     | 12. ニノ堀遺跡の発掘調査について …… 12       |
| 3. 国登録無形民俗文化財—土佐節の製造技術— …… 4      | —山城に隣接する屋敷跡— …… 12             |
| 4. 国史跡土佐藩主山内家墓所の整備について …… 5       | 13. 成願遺跡の発掘調査について ……           |
| —墓標の劣化調査・保存処理・修理—                 | —弥生時代中期の集落跡—                   |
| 5. 津野町久保川お伊勢踊り …… 6               | 14. 香南市香我美町山北恵日寺について …… 13     |
| 6. 伝統行事 宮谷「堂の口あけまつり」 …… 7         | —金剛界大日如来坐像・                    |
| 7. 日本遺産・国指定重要文化財「八幡山跨線橋」について … 8  | 胎蔵界大日如来坐像を中心に—                 |
| 8. どうする？オオサンショウウオ …… 9            | 15. 梶原町の文化財 …… 14              |
| 9. 北地遺跡の発掘調査 …… 10                | —「阿弥陀堂」の経巻の整理・調査について—          |
| —弥生時代中期の人形土製品を発見—                 | 16. 県史跡「貞享元年銘法華経塔」の修理について … 15 |
| 10. 若宮ノ東遺跡—郡衙の正倉(高床式倉庫群)を発見— … 11 | 17. 裏表紙 掲載一覧表 …… 16            |

# 1. 国史跡「土佐遍路道 清瀧寺境内」 — 追加指定 —

土佐市内では高岡町にある第35番札所「清瀧寺」から宇佐町にある第36番札所「青龍寺」へと向かう途中にある塚地峠を越える山道が「土佐遍路道 青龍寺道」として平成28年10月に国史跡に指定されています。

令和3年10月、新たに第35番札所清瀧寺境内が「土佐遍路道 清瀧寺境内」として国史跡に追加指定され、本市では2例目の国史跡指定となりました。

## 清瀧寺について

清瀧寺は土佐市北部の清瀧山中腹に位置しており、今回指定された範囲は公図上では8,793㎡です。



史跡指定範囲

四国遍路の札所として本堂及び大師堂を中心に、山門やこれらを結ぶ参道、境内に鎮座する琴平神社、また禁足地である不入山<sup>いらす</sup>が指定範囲となっています。

指定範囲内の文化財として、清瀧寺の本尊である国指定重要文化財の木造薬師如来立像や本堂の西南にある不入山の頂部にある真如(高岳)親王の逆修塔<sup>1)</sup>といわれてきた五輪塔(高知県指定史跡)、本堂の東側には琴平神社の本殿(高知県保護有形文化財)が



木造薬師如来立像  
(国指定重要文化財)

あります。琴平神社は、清瀧寺の上方の山中に祀られていた金毘羅神を天保2年(1831)に移転して再建したと伝わっています。

今回の指定理由のひとつとして、清瀧寺とその周辺が江戸時代の遍路札所寺院の資料に描かれた構成要素を踏襲していることがあげられます。

清瀧寺とその周辺は大規模な開発が行われておらず、「四国遍禮名所圖會<sup>しこくへんろめいしよずえ</sup>」(1800年)や「皆山集」(明治初期)の絵図に描かれている当時と現在の清瀧寺周辺の様子を比較しても、昔ながらの構成要素を踏襲していることが分かります。

このように、「土佐遍路道 清瀧寺境内」は現在も継承され続けている遍路文化の理解に不可欠な歴史文化遺産であることから、歴史上又は学術上価値の高いものと認められ、国史跡として追加指定されました。



琴平神社本殿  
(高知県保護有形文化財)

## 今後について

清瀧寺とその周辺は近世の遍路札所寺院の構成要素を維持しています。今後、市としては、既に指定されている「土佐遍路道 青龍寺道」と併せて、さらなる史跡の保護及び活用を図りながら、遍路文化を後世に伝えたいと考えております。

下の写真は清瀧寺から見える土佐市街地の風景を撮影したものです。水質日本一に輝いたことのある清流仁淀川はもちろん、天候が良好なときは大海原の太平洋を望むことができます。ぜひ、清瀧寺から見える広大な景色もお楽しみください。



清瀧寺から望む土佐市街

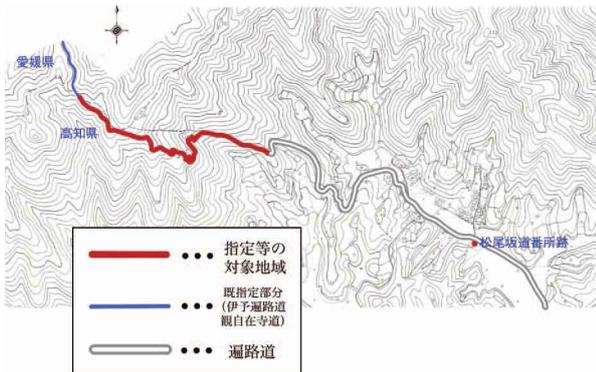
1) 逆修塔…生前に自らの死後の冥福のために建立した塔、生前供養塔

土佐市教育委員会生涯学習課 松岡 拓真

## 2. 国史跡「土佐遍路道 観自在寺道」 —追加指定—

### 国史跡に追加指定

四国八十八箇所霊場と遍路道の史跡への指定について、令和3年10月、高知県宿毛市から愛媛県南宇和郡愛南町へ向かう「松尾峠」のうち、県境から高知県側の約800mの古道が追加指定されました。なお、県境から峠の愛媛県側は、平成30年度に「伊予遍路道観自在寺道」として国史跡に指定されています。



史跡指定範囲図

### 松尾峠

宿毛市平田町の四国八十八箇所霊場第39番札所延光寺の山門近くには、明治33年(1958)の道標があって、「第四十番是ヨリ七里」と第四十番札所観自在寺までを案内しています。ここから「修行の道場」土佐路に次いで「菩薩の道場」伊予路へと向かう道中で、松尾峠を越えます。

松尾峠は、中世以降「松尾坂」と記載のある土佐・伊予国境の難所で、藩政期土佐側は代々土佐藩家老が統治する宿毛領でした。峠の手前に「松尾坂番所」があって、四国霊場巡礼の土佐入出国は、東の甲浦と西の宿毛(松尾坂)に限られていました。

この峠道は当時の街道として陸路の大動脈だったため、遍路のみならず多様で盛んな往来が日常的でした。明治以降も昭和4年(1929)に宿毛トンネルが開通するまでその役割を担い続け、県境付近には高知県・愛媛県両側に茶屋があって、休憩場所になっていました。



古道の要素を残す峠道

### 報告書「土佐遍路道観自在寺道1」

国指定に先立って、県境から宿毛市側の道全長約1km、両側10mの地形測量調査と、周辺の道標など石造物調査、構造物を巡る試掘確認調査を総合的に実施して報告書にまとめました。

茶屋の痕跡を示す成果は得られなかったものの、構造物では石畳で構築の過程がうかがえる収穫があり、調査成果を地形とともに先進の測量技術で記録・データ化できました。



調査時の石畳検出状況

### 今後について

今回の指定範囲は古道の上、峠道で厳しい傾斜のため自然災害の被害が頻発し、今も一部石畳で短期的に迂回が必要になっています。周囲山林の繁茂も著しく、景観を含めると困難な課題があります。しかしながら、有志の方々の定期的な草刈りや、小学生による歩き遍路への応援札の掲示など、地元の精力的で継続的な活動によって明日も気持ちよく、汗をかきながら峠を越すことができます。今後も一緒に歩調を合わせながら、保護や利活用について考えていきたいと思えます。



道端に地元小学生がつけた応援札

宿毛市立宿毛歴史館 矢木 伸欣

※ホームページで報告書「土佐遍路道観自在寺道1」を公開しています。



宿毛市立宿毛歴史館HP  
<https://www.city.sukumo.kochi.jp/docs-26/p010804.html>

# 3. 国登録無形民俗文化財 — 土佐節の製造技術 —

## 創設後、初の登録に

「土佐節の製造技術」は令和3年9月に、国の登録無形民俗文化財制度創設後、初めての登録となりました。登録無形民俗文化財とは、令和3年6月に一部施行された、「文化財保護法の一部を改正する法律」により新たに創設された制度です。

豪快な吊るし切りをはじめとする「土佐切り」や、カビを散布して乾燥を繰り返すことで腐敗を防ぐ「カビ付け」と呼ばれる保存技術等が、今日まで継承されていることが評価されたものです。



土佐節の製造過程(土佐切り)

## 土佐節の製造技術

鯉節の起源は古く、大宝元年(701)<sup>かつお</sup>堅魚として明らかに記録されたものがあります。伝承では、紀州から漂着してきた漁夫に製造を習い、土佐市宇佐町の播磨屋龜藏、佐之助が元あった鯉節に改良工夫を加え、現在の製造技術を確立したといわれています。これらは、歴史研究者である植田穂氏<sup>うえ たのり</sup>によって周知され、広く世に知られることとなりました。



「改良土佐節発祥の地」を記念した碑

宇佐町には改良土佐節の発祥を記念した、「改良土佐節発祥の地」の碑があり、その功績を現代に伝える役目を果たしています。

かつては複数あった土佐節製造業者も、現在では竹内商店の一軒のみとなりました。

三代目の竹内太一さんは、「土佐節の中でも本枯節は、製品になるまでに専門的技術を要する工

程が多く、完成までに約半年ほどかかる、鯉節の最高級品になります。この工程と採算の難しさなどから、今では土佐市内で本枯節を製造するのは当店のみとなってしまいましたが、伝統がこれまで受け継がれ、今回登録無形民俗文化財に選ばれたのは、これまで土佐節に携わってこられた全ての方の功績です。感謝の気持ちを忘れずに、これからも作り続け、『鯉節のまち』として宇佐町を、土佐市を盛り上げたいと思います。」と、その思いを語ってくれました。

## これから

最近では、新聞やテレビなどのメディアでも紹介される機会が多くなり、全国的にも改良土佐節が注目されています。宇佐町に残されているこの伝統技術を、歴史とともに広く伝え、未来のために保護・活用していくことがますます重要となっています。

丹精込めて作られた香り豊かな改良土佐節を、皆さま是非一度ご賞味ください!



土佐節の製造過程(煮熟に使う茹で釜)

土佐市教育委員会生涯学習課 濱田 安紀



土佐節の製造過程(焙乾)

## 4. 国史跡土佐藩主山内家墓所の整備について — 墓標の劣化調査・保存処理・修理 —

土佐藩主山内家墓所は高知市筆山の北斜面にあり、歴代藩主とその妻子の墓域が平成28年3月に国の史跡として指定されています。藩主などの墓標計34基の大半に用いられている石材は砂岩で、加工が容易である一方で、温湿度変化や水の浸透により経年劣化しやすく、外部からの衝撃にも脆いという特徴を持っています。(公財)土佐山内記念財団では、保存整備の一環として墓標の劣化調査・保存処理・修理などを行っています。

### ○保存修理等の内容について

劣化調査は墓標の状態を調べるためのもので、年代の古いものや目視で傷みの激しいものから順に実施しています。調査の結果、劣化が進行しているものには強化処理・亀裂充填処理・撥水処理などを組合わせて保存処理を行います。また、倒木などで損傷したものは、位置や角度を元通り戻し、剥離した破片を接着するなどして修理します。

①足場設置と墓標の再設置 笠部や塔身が転倒したり、ずれたものは足場に設置した滑車とチェーンで吊るして、元の位置に復旧します。大きな墓標の重量は数トンにも及びますが、重機が墓所内に進入できないため、接触部分を傷めないよう耐久性の高い布製のベルトで支えながら、人力で作業を行います。



12代豊資8男喜久衛墓標の再設置  
(株文化財保存活用研究所提供)

②劣化調査 墓標の状態を調査して詳細なカルテを作成するもので、剥離しかかっている部分の空隙を探す方法には主に2つの方法があります。1つ目の打音調査は小さなハンマーで叩いたときの微妙な音の違いを聞き分ける方法で、トンネルの検査などにも利用されています。2つ目の赤外線サーモグラフィ撮影は低温時と高温時の画像を比較し、温度差が不均一となる箇所を探查します。



5代豊房墓標の打音調査  
(株文化財保存活用研究所提供)

③クリーニングと強化処理 生物除去剤を塗布した後、筆やブラシでコケや塵、埃を丁寧に除去していきます。また、強化剤を塗布・含浸することで、脆くなっている石材の強化処理を行います。

④亀裂充填処理・接着作業 剥離の進行が確認された場合は、それ以上広がらないよう樹脂を充填して安定させます。損傷して完全に剥離してしまったものは破片同士を接合し、母材に接着します。



剥離破片接着作業

⑤撥水処理 石材の表面に再びコケ類などが付着しないよう、雨水の吸水を防ぐ効果のある撥水剤を塗布して完了です。

これらの工程のうち、強化処理や撥水処理では使用する薬剤の影響により、石材に色調の変化などが生じる可能性があります。当財団では事前の使用試験を行うとともに、小規模な子供墓標で先行処理を施し、数年間の経過観察を行った上で、大規模な藩主墓標の処理に着手する予定です。



修理後の喜久衛墓標

公益財団法人土佐山内記念財団 池田研

※史跡内は保存活用に向けて整備中のため立ち入りできません。  
特別公開日については下記までお問い合わせ下さい。



高知城歴史博物館HP  
<https://www.kochi-johaku.jp>  
TEL 088-871-1600

## 5. 津野町久保川お伊勢踊り

津野町久保川に受け継がれ、踊り続けられている「久保川お伊勢踊り」を紹介します。

津野町(旧葉山村)は、そのむかし半山村、また葉山村と呼ばれ、久保川集落は新莊川に流れ込む谷川の中のひとつで、久保川川に沿った60世帯くらいが暮らしていた集落でした。

今も国道197号線沿いの「葉山の蔵」から北に入った、40世帯の暮らす集落です。

### お伊勢踊りの伝来

その久保川集落で踊り継がれている「お伊勢踊り」は、400年くらいほど前に、伊勢の国から土佐の国に伝わり、特に高岡、幡多の両郡で盛んに踊られていたようです。葉山村においては、元禄から文化文政時代に特に盛んであったようで、明治に至るまで各地の氏神様で奉納

されていました。今では久保川集落にだけ昔の手振りが継承されて踊られています。



大本神社でお伊勢踊りを奉納

### 久保川のお伊勢踊り

久保川集落には明治初年ごろに、地元の6人の青年たちが隣の貝の川集落から習い受けて伝えたもので、旧正月16日に大本神社において、集落氏子の安全息災、諸災防禦の春祈祷として続けられたゆえ、今日まで伝え続けられています。

「久保川お伊勢踊り」はもともと家々の春祈祷を兼ねて、旧正月過ぎに約10日間の練習踊りを行い、各家では宿主が子供にご褒美のお菓子を、また音頭たちに酒や肴を振舞う習わしがあり、負担は大きい集落の伝統行事として、大切に受けつないできました。

近年は久保川お伊勢踊り保存会主体により、集落の家々に練習宿主をお願いし、集会所において練習踊りを行っています。

奉納踊りの前々日の晩に、幣切りと言われる踊り

子の飾り物である御幣や、太鼓打ちの撥の房などを作り直して、お伊勢踊りの準備をしています。

祭典の当日は、当屋に音頭や踊り子が集まり、その庭で当屋踊りを30分くらい踊り、済ませると列を整えて寄せ太鼓を打ちながら、大本神社に向かい歩いて行きます。



当屋踊り

神官のお祓いを受けた後、大本神社の祭典に合わせて踊りが始まる。昔は、男子の踊り子は、五色の菅笠を冠り

仮装して踊っていました。女子の踊り子は、振袖の衣装で頭に御幣を差し、扇を振って踊っていました。しかし、今は仮装や振袖は使わず、全ての踊り子に衣装を作り、また音頭にも衣装を揃えて、奉納踊りを行っています。



神官のお祓いを受ける音頭と踊り子一同

近年の社会情勢の変化で地元の子供が少なく、年齢を問わず大人も踊りに加わり、また、集落出身者を頼って子供や孫を誘って踊っています。

祭典奉納踊り終了後には、子ども達には慰労のお菓子がたくさん振る舞われ、大人たちは直会なほらいと称する酒宴を盛大に行い行事の全てを終了します。

この「久保川お伊勢踊り」は、久保川集落の心のつながりを保ち、生活や地域の維持には欠かせないものであり、次の世代に繋げて行くことが私たちの役割です。

久保川お伊勢踊り保存会 会長 岡崎好友



扇を翻し優雅に踊る踊り子

## 6. 伝統行事 宮谷「堂の口あけまつり」

津野町宮谷地区では、毎年2月の最終日曜日に明王寺境内にある伝統文化芸能保存館前で大きなわらじを作る宮谷堂の口あけまつりが行われます。

この祭りでは、縦2.5m横1.8mの大わらじ(金剛バッコとも呼ぶ)を片方の半分まで作成します。

発祥の時代は不明ですが、数百年前に疫病が流行し、多数の死者が出たため魔除けとして大わらじを作り始めたと言われています。半分までしか作らないのはこの地には、こんな大わらじを履く大男がいるぞ、まだ半分しか出来ていないのだから、これからまだまだ大きくなるぞと疫病神を脅して地区に入ってこないようにするためです。



宮谷集落の入口に掛かる魔除けの大わらじ

### 伝統の大わらじ作り

堂の口あけまつりは、地区民が総出で行う一年で最初の祭りで、当日の早朝、地区民が育てた稲わらを各自が持ち寄り指示されなくても、自由に各々得意とする位置に分かれて作業を始めます。大わらじを作る組では、最初は大わらじの(ひきそ)と呼んでいる太めで長い縄を作る人がいてそれが完成すると次に8人ほどでカシの木と竹で出来た骨組みに、わらをねじり太い縄にしながらかき付けて行き大わらじを作っていきます。

別の組では地区入り口の道路上に東西に張り渡す大しめ縄作りを行います。この大しめ縄には、飾り房が三か所取り付けられますが、又、別の組がこれを作成します。大しめ縄が完成したら、大しめ縄作成組は、次に大わらじの足ひもに当たる部分を作っていきます。最初と最後は細めに作って土台部分の大わらじ本体に取り付ける際に部分的に膨れ上がらないようにするためですが長年の経験を生かした作業で



地区民の協力による大わらじ作り

もあります。大わらじ本体に足ひもの部分の取り付けが終わると鼻緒の部分を作り上げ全体の毛羽立ちを化粧刈りすれば完成です。その他にも、(すぼ、と呼んでいる)わら二束分くらいを細縄で4か所程度縛り上げ穂先を三つ編みにして把手に作り上げたわら製の器を丁寧に作り上げる方たちもいます。(すぼ)の中には薬師堂にお供えしてあった、ご飯やお煮しめを入れてあります。

大わらじと大しめ縄、すぼが、完成すれば薬師堂の前に立て置き一年の無病息災を祈願してお祓いと祈禱を受けた後、地区の男衆10人ほどが地区の入り口である国道沿いまで担いで運び飾り付けをします。その後、大わらじと一緒に飾り付けしてある(すぼ)の中のご飯やお煮しめの具材を各自少しづついただくのが習わしです。

堂の口あけまつりは地区民にとっては、春の訪れを告げる節目の祭りでもあります。

近年人口が減少傾向にある地区になりつつも外部で生活している出身者も子供連れで帰って来て参加してくれており、このお祭りが長く続いてほしいと願っています。

津野町宮谷地区長



薬師堂に奉納した大わらじ

# 7. 日本遺産・国指定重要文化財

## 「八幡山跨線橋」<sup>はちまんやまこせんきょう</sup>について

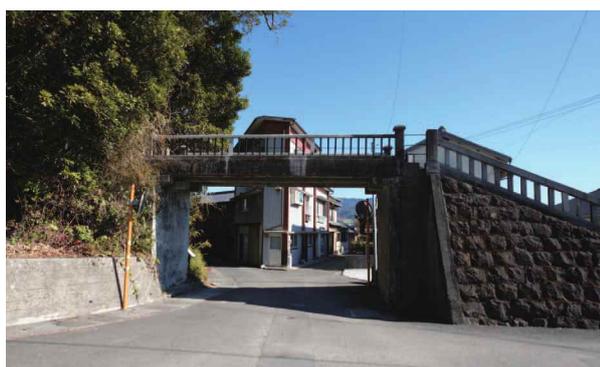
高知県東部の中芸5町村(奈半利町、田野町、安田町、北川村、馬路村)には、今も森林鉄道の記憶を残す遺構が数多く存在しています。

明治44年の開通時に建造された隧道などが、平成21年2月に経済産業省の近代産業遺産群に認定されました。同年、橋梁や隧道など18箇所の貴重な土木建造物が国重要文化財に指定されました。(田野町 八幡山跨線橋・立岡二号栈道)

そして重要文化財18箇所を含む、遺構や食文化、歴史、伝統行事、風景など48の構成文化財とストーリーが平成29年度に日本遺産に認定されました。

八幡山跨線橋は、鉄道を跨いで八幡神社へ至る参道として昭和8年4月に架設されました。

所有者は田野八幡宮です。



八幡山跨線橋

### 跨線橋保存修理

令和3年7月から足場を設置し、保存修理を行いました。

- ① 欄干…コンクリート内の鉄筋<sup>(※)</sup>が酸化により膨張し、ひび割れを起こしコンクリートが剥落していました。破損部分の欄干のコンクリートを剥ぎ、支柱の鉄格子のさびを落とし、防錆後、仕上げの仕様を確認のうえコンクリート復旧しました。
- ② 橋桁…欄干と同じく鉄筋<sup>(※)</sup>が酸化により膨張し、ひび割れ・爆裂を起こし縦割れと横割れが確認されました。ひび割れはモルタルを注入して補修し、爆裂部は、コンクリートを剥ぎ、鉄筋<sup>(※)</sup>の状態を確認し、防錆後、コンクリートを復旧し令和3年8月25日に修理が終了しました。



修理前の手摺部分の破損



修理後の欄干

### ※修繕中に確認できたこと

昭和8年の架設にあたり、欄干部分・橋桁には鉄筋の代わりに旧魚梁瀬森林鉄道に使用されていたと思われるレール(1911年ドイツkrupp社製)が使用されていました。



ドイツ製のレール(手摺部分)

### 案内板設置について

平成21年に重要文化財に指定された際に、設置した説明板が腐食し破損していました。

また、日本遺産に認定された後、案内板がないことから、訪れた方から場所がわからないとの指摘がありました。以上のことを踏まえ、案内板5箇所と説明板2基の設置を令和2年度に検討し、令和3年5月から8月にかけて設置しました。

新規設置の案内板は、日本遺産ゆずとりんてつ(中芸5町村)の地域内で統一のデザインとなるよう、令和元年度に安田町が設置したものを基本に制作しました。



新規設置案内板

田野町教育委員会 松田 卓哉



日本遺産ポータルサイト  
<http://japan-heritage.bunka.go.jp/ja/stories/story051/>

## 8. どうする？オオサンショウウオ

オオサンショウウオは世界最大級の両生類で、1952年に国の特別天然記念物に指定されました。主に川の上流で生活しており、岐阜県から西の本州と、四国と九州の一部に分布します。ただし、地域により昔からいた動物、すなわち、在来種かどうかは不明とされており、高知県もその一つでした。高知県が本種を外来種としたのは2020年7月です。外来生物法は、おおむね1868年(明治元年)以降に外国から日本に定着した種を外来種としています。そこで高知県の外来種とは、おおむね1868年以降に県外から入ってきて定着した種となり、ルーツが外国かどうかは問いません。なお、外来種と移入種は同じです。

本種についての私の見解は、高知市文化振興事業団発行の「文化高知」の第215号(2020年5月)、216号(同7月)、217号(同9月)に掲載されています。問題解決のヒントは、四国のできかた、一生を淡水で過ごす純淡水魚の分布、愛媛県大洲市の本種の化石です。四国でもとからいた純淡水魚の種数が本州に最も近いのは瀬戸内側の川、次が四国山地を西から東に流れる吉野川、最も少ないのが高知県の川です。県内の川は秩父帯とその南の四万十帯を流れています。四国が本州・九州と陸続きだった時代に、秩父帯と四万十帯はすでに付加していました。四万十帯は最も新しい陸地なのです。やがて瀬戸内海が入り込み、四国山地が隆起を始めます。純淡水の動物の分布は水系に左右されます。西日本にいるカワムツが昔から県内の川にいたのは、陸続きの時代に本州からの水系があったことを意味します。オイカワは瀬戸内側の川には昔からいましたが、四国山地の隆起で分布域を南に広げることができませんでした(県内のオイカワは移植)。四国での本種の確実な記録は四国山地の北の大洲市の化石だけです。

1967年5月と翌年の7月に、旧窪川町の2地点でそれぞれ複数のオオサンショウウオが発見されましたが、町民による広島県と岡山県からの持ち込みでした。その後、県内各地で単独の個体が発見され

ましたが、すべて持ち込みでしょう。

ところが、越知町の仁淀川の支流、坂折川<sup>さこおり</sup>注の本種に研究者は気づいていませんでした。2002年ごろから下流で頻繁に見つかりだし、2004年に上流で幼生が、2015年から2017年にかけて産卵が確認されました。しかしこれだけで在来種と断定できません。過去の情報が必要です。調査チームは、昭和一桁の時代にはいたとの情報を得ました。昭和元年は1926年です。1925年から、仁淀川にいなかった多くの純淡水魚が吉野川から移植されました。琵琶湖の稚アユ放流の開始は大正の中ごろとされ、高知県でも放流されています。昭和一桁の時代に、水生動物の輸送手段がすでにあったのです。誰が本種を坂折川に持ち込んだかは不明ですが、ある程度まとまった数だったのでしょう。私見をまとめた段階で、坂折川の個体のミトコンドリアDNAが京都市の集団にきわめて近いことが判明しました。間違いなく外来種です。

外来種は地域の生物多様性にしばしば大きな影響を与え、オオクチバスはその典型です。外来種の分布の拡大は防がねばなりません。しかし本種は特別天然記念物。市民は勝手に捕獲・殺傷できないのです。さてこれからどうするか？ 今、大きな問題に直面しているのです。

注：国土交通省河川局は坂折川、地理院地図は大桐川、Googleマップは桐見ダムより上流を大桐川、下流を坂折川としています。

高知大学名誉教授 高知県文化財専門委員(動物) 町田 吉彦



坂折川で確認された個体

# 9. 北地遺跡の発掘調査 — 弥生時代中期の人形土製品を発見 —

## 調査の概要と経緯

香南市教育委員会では、令和3年6月から約1ヶ月間、香南市野市町下井に所在する北地遺跡の発掘調査を実施しました。この調査は、住宅建築に伴い影響を受ける範囲を対象とした、記録保存を目的としたもので、調査面積は試掘調査を含め約150.0㎡です。

北地遺跡は野市台地の西端、物部川左岸の段丘上に立地します。周辺は香南市内でも遺跡が集中する地域の1つで、近隣の上岡遺跡や下ノ坪遺跡、西野遺跡などで弥生時代前期末から近世まで、人々の生活の痕跡が確認されています。北地遺跡では、今回の調査区の北部約250mの地点で平成15年度に調査が行われ、弥生時代前期末から中期中葉、後期前半から後期中葉、古代から中世の遺構や遺物が発見されています。



発掘調査風景（北から撮影）

## 調査の成果

今回の調査では、13×10mの狭小な範囲内で竪穴建物跡6軒・土坑17基・溝11条・柱穴104個・性格不明遺構2基が確認されました。特に、調査区北部の壁へ延びる楕円形の竪穴建物跡は、推定長軸8.5m、短軸7.6mと大型で、3軒が重なりあって検出されました。中には1辺が約4.9mを測り、隅部と中央部に溝がある、隅丸方形の竪穴建物跡も確認されています。



弥生土器出土状態

出土遺物は、一部の溝から少量の須恵器が確認されていますが、ほとんどを弥生時代中期の土器が占め、コンテナ数で50箱程の大量の遺物が出土しました。特に注目されるものの1つに、遺物包含層から出土した人形土製品が挙げられます。人間を模したとみられる土製品で、頭部片が出土しました。目・鼻・口の各部分に小さな孔が穿たれ、目の下には3条の刺青のような線刻が施されていますが、首からは残念ながら欠損しています。高知県内の類例としては、人面に動物のような体を持つ土製品が田村遺跡群から出土していますが、刺青のような装飾が施されたものは県内初の事例です。この他にもサヌカイト製の石槍や、ふとがたほりぼせきふ大型の太型蛤刃石斧、磨製石包丁などの石器と併せて、弥生時代中期中葉の良好な一括資料となる土器が出土しました。



人形土製品

## まとめ

高知平野では弥生時代前期末から中期初頭にかけて、物部川対岸の田村遺跡群から分村した集落が周辺に増加すると考えられていますが、これまで中期中葉の竪穴建物跡はほとんど確認されていませんでした。今回の調査では、弥生時代の集落の変遷を知る貴重な機会を得ることができました。人形土製品については、引き続き全国的な類例調査を行い、性格や位置づけについて迫っていきたいと考えています。

香南市文化財センター 横山 藍



遺構完掘状態（東から撮影）

# 10. 若宮ノ東遺跡 —郡衙の正倉(高床式倉庫群)を発見—

南国市篠原の若宮ノ東遺跡では、土地区画整理事業が行われることに伴い、南国市教育委員会が発掘調査を行っています。今年度、遺跡の北側で弥生時代後期～古墳時代初頭の竪穴建物跡が新たに6軒、古代の総柱建物跡が4棟とそれに関連していると考えられる溝状遺構を発見しました。総柱建物跡の規模はいずれも3間×4間、面積は概ね50㎡以上の長方形に揃っていて、2棟(図①②)が南北方向を軸に、2棟(図③④)が東西方向を軸にしていました。2棟が見つかった調査区の東側を令和2年度に調査した際にも同じ規模の建物跡が1棟(図⑤)見つかり、合わせて3棟が並んでいた様子がわかりました。また、これまでの調査で発見された総柱建物跡3棟(図⑥⑦⑧)が同じ規



正倉(高床式倉庫群)位置図

模で南北方向を軸にした長方形に揃っていました。これらの建物跡は、柱筋を揃えながら規則正しく並んで建てられており、郡衙(各郡に置かれた役所)の正倉と考えられます。正倉の中には、律令制の租税制度で定められた地方の財源である「租(穀物)」が納められていました。このような正倉群は県内では類例がなく、新たな発見となります。

南国市教育委員会生涯学習課 矢野 雅子



③、④完掘状態(南西から撮影)

# 11. 野中廃寺について —見えてきた謎の古代寺院—

## 野中廃寺について

野中廃寺は長い間謎の古代寺院とされてきました。今年度、分譲住宅地の建設工事に伴い、南国市教育委員会が発掘調査を行い、徐々にその背景が明らかになってきました。その成果をご紹介します。

## 調査の成果

寺院を形成する主要な建物のことを伽藍といいます。今回の調査により中門(図①)、塔(図②)、金堂(図③)、講堂(図④)の位置が判明し、その配列から法起寺式の伽藍配置だということが判明しました。伽藍配置が明らかとなるのは県内では初めての例になります。



伽藍配置俯瞰図

講堂の東側から南北棟の桁行9間、梁行3間、面積が124.7㎡の大型掘立柱建物跡が発見されました(図⑤)。方位は伽藍の軸に合わせて建てられており、これは僧の住居である僧房の可能性が高い

と考えられます。また、同じような建物跡(図⑥)が講堂の北側からも見つかったことから僧房は建替えられたと思われる。

出土遺物は寺院との関係が深い須恵器の蓋などを硯に転用した転用硯や鉄鉢型の須恵器、二彩陶器など数多く出土しました。二彩陶器は県内の出土例が3例目となる珍しいもので、大型の壺や瓶ではないかと考えられます。また、出土遺物の年代から7世紀後半～10世紀頃の寺院であると推測されます。



二彩陶器

## まとめ

野中廃寺の南西約500mの位置には若宮ノ東遺跡があり、近年の調査で7世紀後半の役所の建物跡が見つかりました。同じ時期に存在した寺と役所。この2つの施設には深い繋がりがあられるのかもしれない。

南国市教育委員会生涯学習課 田上 修造

## 12. 二ノ堀遺跡の発掘調査について —山城に隣接する屋敷跡—

### 遺跡の概要

二ノ堀遺跡は高知市春野町に所在する、弥生時代から江戸時代にかけての遺跡です。県道甲殿弘岡上線建設に伴い、影響を受ける部分について、隣接する森山城跡と共に令和2・3年度に発掘調査を行いました。二ノ堀遺跡及び森山城跡の発掘調査は今回が初めてとなります。

### 調査成果について

発掘調査では、古代末から中世前期、中世後期から江戸時代初期、幕末と三時期の遺構と遺物が確認されました。特に、中世後期の二重の堀で囲まれた屋敷跡は規模も大きく、2箇所を確認されており、広範囲に屋敷地が広がっていたものと思われます。出土遺物より15世紀に機能していた屋敷跡とみられ、森山城跡と同時期に存在したことが明らかになりました。この屋敷跡は森山氏に関連するものとみられ、中世前期の遺物も出土していることから、この時期

から森山氏が活躍していた可能性があります。さらに16世紀後半から江戸時代初期の遺構は、「長宗我部地検帳」によると森山城周辺には香宗我部氏家臣の屋敷地がみられ、森山城が落城した跡もこれらの屋敷が存在したものとみられます。

高知県立埋蔵文化財センター 徳平 涼子



確認された屋敷跡

## 13. 成願遺跡の発掘調査について —弥生時代中期の集落跡—

### 遺跡の概要

成願遺跡は物部川の河川堆積によって形成された扇状地上に立地します。南国市の国営ほ場整備事業に先立つ試掘調査で発見された遺跡です。今回は同事業の影響を受ける範囲において発掘調査を実施しました。



調査区遠景（北から撮影）

### 調査成果について

今回の調査では、平安時代末頃から鎌倉時代の溝のほか、弥生時代の遺構がみつかりました。弥生時代の遺構には、円形の竪穴建物跡や貯蔵穴と考えられる複数の土坑などがあり、この場所で集落が営まれていたことがわかりました。調査区の南端では幅約2.0m、深さ0.6m前後の溝がみつかり、集落を囲っていた可能性があります。竪穴建物跡のう

ち最も大きなものは直径8.6mを測ります。この建物の床面からは複数の柱跡がみつかり、繰り返し建替えが行われたようです。遺物は弥生土器のほか石鏃・石斧などの石器が出土しており、これらの遺物から弥生時代中期中葉頃に営まれた集落と考えられます。この時期の集落跡は県内でも調査事例が少なく、あまり様相がわかっていません。これまで空白だった時期を埋める資料として、高知県の弥生文化の発展過程を知る手がかりとなるかもしれません。

高知県立埋蔵文化財センター 綾部 侑真



柱跡が複数みつかった竪穴建物（東から撮影）

# 14. 香南市香我美町山北恵日寺について

えにちじ  
こんごうかいだいにちによらいざぞう たいぞうかいだいにちによらいざぞう

## —金剛界大日如来坐像・胎蔵界大日如来坐像を中心に—

### はじめに

恵日寺は、香南市香我美町<sup>きらく</sup>の聞楽山山頂から尾根続きの東側側面にあります。



恵日寺

恵日寺の由緒を紐解いてみると、忍性<sup>にんしょう</sup>という僧の存在が浮かび上がってきます。忍性は鎌倉時代に活躍した僧で、神奈川県鎌倉市にある極楽寺の開祖です。民衆の救済に生涯をささげたことで知られ、弘安10年(1278)には貧民救済のため現在の鎌倉市に桑ヶ谷療養所を創設します。創設にあたって、鎌倉幕府の執権北条時宗から土佐<sup>おさとのしゅう</sup>の大忍荘を寄進されました。大忍荘とは、現在恵日寺が位置する香南市から隣り合う香美市を含んだ地域にかつて成立していた荘園のことです。このことから忍性が土佐守護にあてた「恵日寺院主補任通知状」(恵日寺の住職の任命状)が残されており、少なくとも13世紀には恵日寺が成立していたと考えられます。

また、天正から慶長年間(1573~1615頃)に土佐で行われた検地の結果である長宗我部地検帳では、恵日寺が大忍荘山北村、山南村、逆川村を寺領としていたことが記されており、その隆盛ぶりがうかがえます。しかし、南路志では、「かつて有した脇坊七坊が退転している」と記され、近世には勢力が衰えていたようです。さらに明治4年には廃仏毀釈により廃寺となり、以降は、香我美町岸本<sup>ほうどういん</sup>の宝幢院が管理するところとなり、昭和時代に恵日寺の寺格を回復しています。

### 二軀の大日如来

恵日寺には、重要文化財に指定されている平安時代後期の仏像が三軀安置されています。一軀は御本

尊の十一面観音立像、残る二軀はいずれも大日如来坐像です。令和2年から3年にかけて、恵日寺では屋根の修繕工事が行われ、その間、これら三軀の仏像を当館がお預かりしました。

二軀の大日如来坐像は「金剛界」と「胎蔵界」で区別されます。金剛界の大日如来坐像は、左手の人差し指を右手で握る「智拳印<sup>ちけんいん</sup>」という特別な手のかたちをしているので、すぐに見分けることができます。しかし、構造や大きさ、身に着けているものから表情、髪形などの表現にいたるまで、二軀の大日如来坐像には共通点が多く、当初から一対で製作されたと考えられます。

両界の大日如来を一対で製作した例は、県内には他にありませんが、全国的には広島県浄土寺や島根県大日如来堂、鳥取県立博物館所蔵像などがあり、いずれも平安時代後期の作例とされています。では一対の大日如来はどのような考え方にに基づき製作され、どのように祀られていたのでしょうか。実は明確な答えはでていません。大日如来を中心とする密教は平安時代に日本に伝わり、それまでの釈迦を中心とした顕教と融合していきました。その過程でどのような変容があったのか、この問いに答えるために、恵日寺の大日如来坐像二軀はとても重要な存在です。



金剛界大日如来坐像



胎蔵界大日如来坐像

# 15. 栲原町の文化財 —「阿弥陀堂」の経巻の整理・調査について—

## 阿弥陀堂について

町保護民俗文化財「阿弥陀堂」は、栲原町役場から車で25分ほど国道439号を南下した影野地区に所在し、「四万十川流域の文化的景観～上流域の山村と棚田～」における重要な構成要素の一つです。現在の建物は、室町時代以来所在していた宝積山善応禪寺の本堂で、初道頼賢大徳(影野地区の開祖)の創建といわれています。



阿弥陀堂の外観

## 経巻について

堂内に納められている町保護有形文化財「阿弥陀堂の経巻」は、いずれも卷子装です。もとは華嚴経・方等経・法華経・般若経・涅槃経など210巻が存在したと伝わりますが、現在残るのは198巻で、149巻が写本、2巻が刊本(版本)です。

また、経典とともに目録として、「祈念目録」「法要目録」「整祭目録」など43通が納められています。阿弥陀堂では4年に1回、「閏祭り」が執り行われており、明治3年(1870)以来、祭礼を行うたびに立会者が署名した「整祭目録」は、150年以上の長きにわたり地域の方によって記録保管されているものです。



目録への署名の様子

## 高知城歴史博物館による調査

平成26年度から令和元年度にかけて、高知県立高

知城歴史博物館の協力により経巻の整理調査を行いました。経典の劣化により、その多くは開閉が困難でしたが、1巻(通し番号B-30)のみが反対巻きで保管されていたため、巻末部分の奥書から「明德」(南北朝時代、14世紀末)の年号を確認することができました(以下抜粋)。

### B-30 大方等大集経巻十八

奥書「于時明德□□□□[ ]守重并上□現世  
安穩後生善所尽祈祷無病□息延命安穩□□  
五穀成就□御願皆令満足」

令和2年2月29日に行われた閏祭りでは、高知城歴史博物館の方から調査報告を受けたあと、地域の方が経巻や木札などの収蔵品を確認し、「整祭目録」に署名しました。

経巻の詳細については地域の方でも知らないことが多く、理解が深まるとともに、その価値を再認識できた良い機会となりました。



唐櫃に納められた経巻



B-30大方等大集経巻第十八

## 今後の継承について

地域の集会所として、また災害時の一時避難所として地域の方たちに活用されてきた阿弥陀堂ですが、経年の劣化に伴う建物の損傷がみられるため、令和4年度に国の文化的景観保護推進事業を活用して屋根の塗装や雨戸等の修理を行う予定です。

先祖の平和を願う気持ちが直に伝わる貴重な史料を、阿弥陀堂と共に後世に伝えていくため、今後も大切に保管し、記録を続けていきます。

栲原町教育委員会生涯学習課 垣内 なつき

# 16. 県史跡「貞享元年銘法華経塔」の修理について

## 「貞享元年銘法華経塔」について

「貞享元年銘法華経塔」は近世初期(1684年)の石塔で県内に所在する3基が、昭和52年4月1日に高知県史跡に指定されています。

この石塔はいずれも同じ形態で、土佐国の東の玄関である東洋町甲浦、中央玄関の高知市五台山、西の玄関の宿毛市に建てられ、土佐における日蓮宗の伝播を探る上で貴重な資料群です。

その中で高知県安芸郡東洋町大字甲浦にある萬福寺境内への参道に所在する石塔はいわゆる題目式笠塔婆<sup>1)</sup>といわれる石造物です。

全高約3mの大型の石塔は、正面に大きく「南無妙法蓮華経」とあり、その右下に「告／貞享元甲子曆十月十三日(1684年)」、左下には「畑郡(幡多郡)柏島廣布山法蓮寺本法院日教願作」と銘文があります。銘文には柏島の法蓮寺の僧日教がその祈願により土州(土佐国)中の3ヶ所にこの経塔を建てたと刻まれています。



正面笠の亀裂部(修理前)



背面の剥離欠損部(修理前)

## 保存修理事業について

石塔は背後を山崖にして湿気も多い場所にあるなどの諸条件から笠部に苔類などの繁茂が見られました。状態は笠部南東側の角が欠失し、塔身底部にも経年による石質の劣化で表面の剥離・剥落が生じ、また、石材内部への水分侵入等による脆弱化の恐れがありました。特に銘文のある塔身下部は劣化が著しく、多くの亀裂や剥離が見られる状態でした。

そのためこれ以上の脆弱化、剥離や剥奪等の進行を防ぐとともに各部の保存処理を行うことで、石材の健全化を図り保存活用につながる必要性があり、令和3年度に事業化しました。

## 修理と保存処理の方法

今回の修理は公益財団法人元興寺文化財研究所によって行われ、経年による傷みのある石造の構造を安定させ、安全に自立することを目的としました。そのため大幅な形状の復元などは行わずに、現在の形状を維持させるための方法を選択しています。

保存修理は作業を3工程に分け、第1工程をクリーニングや石材強化剤の含浸、第2工程を撥水剤の含浸、第3工程を接着及び補填等の修復作業と擬石処理を行いました。



貞享元年銘法華経塔の修理の様子

クリーニングは石材の

表面を傷つけないように埃やコケなどの付着物を除去しました。その後、全体の強度を向上させるため、石材強化剤を金体に噴霧、含浸させました。強化剤は石材中のケイ素と強化剤成分が反応し、石の粒同士をつなぎとめるような働きをするものです。強化後、石材の劣化要因の一つである水分の浸透を抑制するため、撥水剤を全体に浸透させました。

最後に大きな亀裂が走っている箇所を補強するため、耐候性の高いエポキシ樹脂系の接着剤や充填剤を使用して補強を行いました。補強箇所に合わせて顔料(色粉)を混ぜながら都度丁寧な作業を進め、修理と保存処理を終えました。



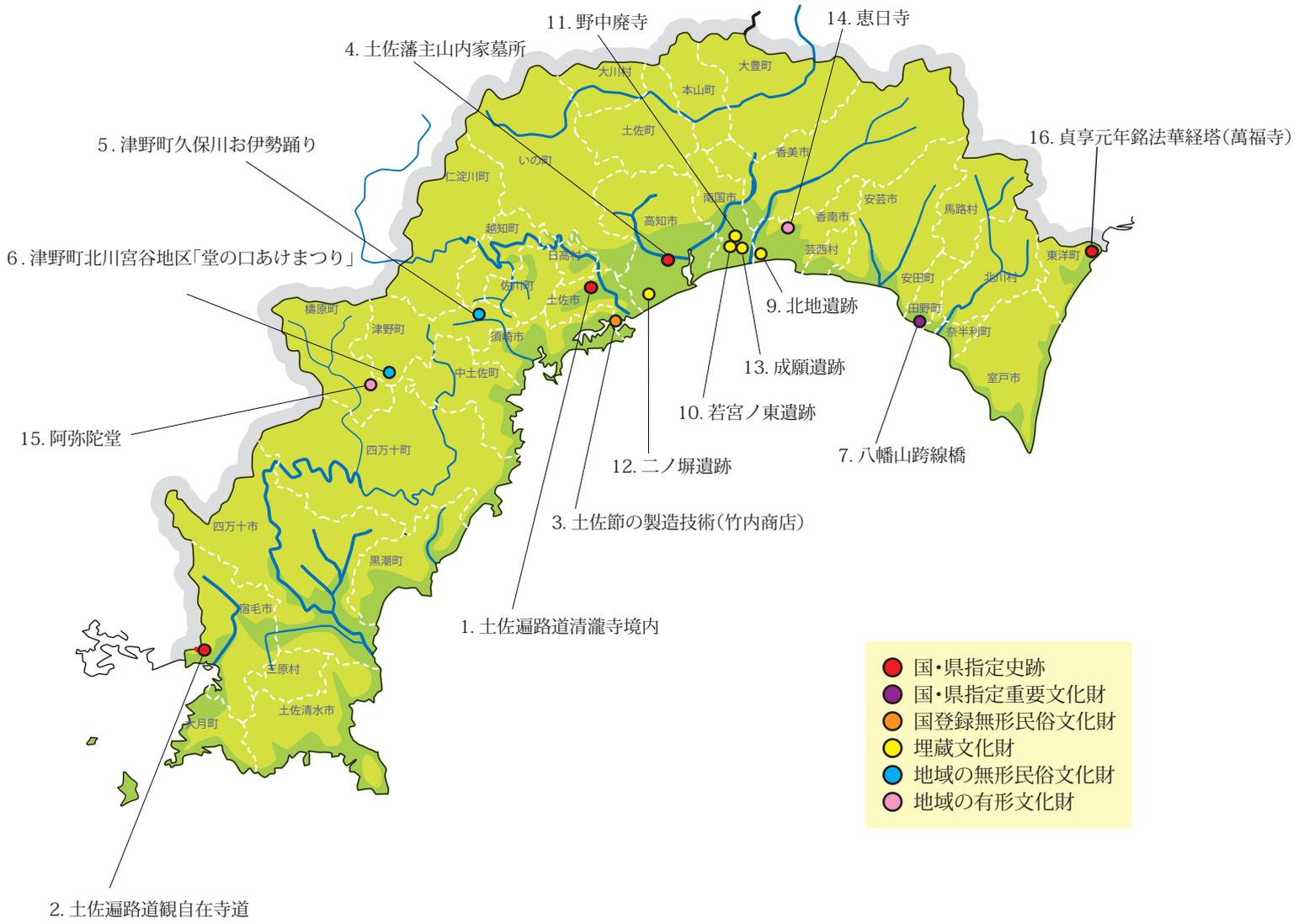
貞享元年銘法華経塔(修理後)

萬福寺の貞享元年銘法華経塔は、県及び東洋町の歴史、財産として後世まで保存していく必要性があります。今回の修理を機に地域の方だけでなく、県内各地に経塔に興味を抱く人が増え、現地を訪れる方が多くなることを期待しています。

東洋町教育委員会 足達 幸伸

1) 題目式笠塔婆…題目とは日蓮宗等における「南無妙法蓮華教」の7文字を指し、笠塔婆は石造物の形状を現すもので、上部に笠の形をした石材が乗ったもの。

# 掲載文化財位置図



みんなでお守ろう文化財

文化財こうち 第 8 号

令和 4 年 3 月 31 日

編集・発行 高知県教育委員会文化財課

〒780-0850 高知県高知市丸ノ内 1-7-52

印刷 池田印刷株式会社